



1986-5

No. 212

【表紙】

「坑夫」

(荻原守衛作)

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

特集：改定現代仮名遣い

級名遣いについて	林 大	4
ドラマと級名遣い	寺島アキ子	8
ファクシミリ・ゼロックス・ワープロ	西村 忍彦	10
改定現代仮名遣い		
—第16期国語審議会答申—		15

報 告

ハングルの国に旅して	野村雅昭	16
------------	------	----

随 想

京都国立近代美術館時代の思い出	河北 倫明	18
-----------------	-------	----

名勝紹介シリーズ②

室町時代の庭園	—金閣と銀閣—	20
---------	---------	----

新任のごあいさつ

文化財保護部文化財鑑査官	田邊三郎助	22
文化財保護部伝統文化課長	草場 宗春	22
文化部宗務課長	長谷川正明	22
文化財保護部企画官	飛田 真澄	22
奈良国立文化財研究所長	鈴木 嘉吉	23

静岡県立美術館オープン!	23
--------------	----

文化庁ニュース

・昭和61年春の褒章受章者決まる	24
・昭和61年春の勲章受章者決まる	24
・日本芸術院賞受賞者決まる	25
・重要無形文化財の指定等	26
・重要文化財(建造物)の新指定	
—文化財保護審議会の答申—	29

・文化庁行事報告及び予定	30
・国立劇場ニュース	31

## 京都国立近代美術館時代の思い出



河北倫明

去る四月二十三日夜、京都グランドホテルで私に対する「惜別の集い」という身にあまる会が催され、七百人もの方々にお集りいただいたことは感激的であった。京近美の評議員会会長で元京大総長の平沢興先生をはじめ、上村松篁、池田遙邨の諸画伯、それに新京都府知事の荒巻禎一さんや京都商工会議所会頭の塚本幸一ワコール社長らが丁寧なあいさつを下さったほか、黒紋付きの祇園芸者衆による「手打ち」、金剛巖さんの舞囃子や、賑やかなフラメンコなど、鮮やかに印象深い集いであった。私にとって京大時代の師でもある源豊宗先生が今日の会はきつと長く河北さんの胸に残ることだろうと締めくくりの言葉を述べられたが、事実、この温かい「惜別の集い」によって、私の十七年二か月にわたる京都時代は実に気持ちよく、また美しく幕を引かれた感じが深い。

私が京都国立近代美術館（以下、京近美）の館長として任に任いたのは、昭和四十四年二月のこと、初代館長の今泉篤男さんがその前年末、病に倒れたところから急きよそのあとを受けたものであった。当時、私は故石橋正二郎氏の意を体して北の丸の東京国立近代美術館（以下、東近美）の新當に当っており、その完成も近かったから、東近美の次長を完成までは兼任するという多少奇妙な身分のまま、京都に赴いた。その兼任は東近美の新館完成とともに解けたのである。

ところで、京近美のことだが、これはもともと高山市長がフランスから返還される松方コレクションを京都で受け入れたいと考えたことに起因する施設である。松方コレクションはフランス側の意向で西洋美術館を上野に新當して入れると決まったため、若干の曲折の後、京都には国立近代美術館を置くということになった。そこでまず京都分館が昭和三十八年に誕生、昭和四十二年に独立して今日の京都国立近代美術館となり、今泉さんが初代館長となったのである。その今泉さんのあと京近美を引きつづけた私は、事業を進める

うち、ここでも東近美の京橋時代と同じく、何としても施設が貧弱で、このままでは発展は難しいと見た。またまた新當事業が不可欠となったのである。しかもこんどは東近美の場合とは時代も状況も異なり、政府予算でやるのが妥当と考えた。順調に行けば昭和五十二年ぐらには実現という目やすを立てて計画に入ることが思い出される。

が、この事業には想像以上に多くのハードルが介在した。多数の方々の好意にもかかわらず、かんじんの土地問題の点で二転、三転した。その間に次々と状況は変化し、あちこちで人も入れかわり、何回も計画を更新しながら、ほぼ十年の歳月が流れた。最初に調査費三二〇万円がついたのが昭和四十七年で、新館建設予算として五十億近くの総工費が認められたのは昭和五十八年度である。ここまで来るには実に各方面の数知れない応援があったことはいまでもない。この背景の上に、横文彦氏のスマートな設計になるポストモダンともいえそうな新館が今秋の開館をめざして着々と進行している。私としては何とも嬉しいことである。

東近美新當のときもだいたい完成が見えたところで職を移したが、今回もまただいたい見当がついたところで立場を去る羽目となった。偶然とはいえおもしろいめぐりあわせである。竣工のめどさえ立てば、お前はそれで十分だろうと神様が微笑しておられるような気がしないでもない。事実、私は東近美の場合も、京近美の場合も、どっちもその新當の根まわしをする役目が果たせたことで十分満足している。

さて、建物づくりの話を書いたが、むろん私の本業はそちらではない。美術館屋としては展覧会が主体であり、評論屋としては原稿書きや審査や講演などが仕事で、それらに次から次に追いかける日常を過ごしてきた。その間には、あちこちの外国旅行もはさまるし、国内も北海道から九州まで都合のつくか

ざり出かけた。おかげで、京近美十七年間は仕事から仕事の毎日、アツという間に過ぎたようなものであった。

京近美でやった展覧会は、30万人近く入った賑やかな展覧会から、やつと何千人という哀れな展覧会まで、各時代各分野のものにわたり、まことに多様であった。どの美術館もやるような名作展や個人展、あるいは各種の概観展望の展覧会のほか、とくに工芸の分野ではユニークなものはいくつかあった。中でもワコールの塚本社長と連携して実行した「現代衣服の源流展」とか「浪漫衣装展」とかいったものは、日本の美術館ではどこも手をつけなかったものであろう。いずれも全国から十万以上の観客が集まったが、ふだんの会と違っておおぜいの人々が近美に群がった情景は忘れられない。そういう意味では、アメリカのキルトやイギリスのニードル・ワークの展覧会なども、おおぜいの婦人層を集めると同時に、以後この分野に世間の新しい関心をひききかけを作った点で先駆的であったと自負している。昨年ひらいたポストモダンの地平からする現代デザインの展覧展などもそうした流れの一つで、こういう京近美流ともいべき新しい心と感覚を開拓しようという企画は今後もきつと持続されることであらう。

最初に述べた「惜別の会」の時にも話したことが、京近美の十七年は、私にとっては、日本の文化と歴史が千年かかって作りあげた美しい古都での幸せな一時代であった。そこを去るといっても、京都はどこまでも日本とともにあり、これからは別の角度でいつそう親しくなるはずだと思っている。

河北倫明（かわきた・みちあき）

大正3年、福岡県生まれ。京都大学文学部卒。東京国立近代美術館次長等を経て昭和44年、京都国立近代美術館館長に就任。以来十七年余り務め、61年3月で勇退。現在、公職を退き、東京の自宅にて美術評論家として、研究に専念する。

編 集 後 記

○先月号でお知らせしましたように、三月六日に開かれた国語審議会において、昭和五十七年三月以来検討が行われてきた「改定現代仮名遣い」が答申されました。林 大先生の巻頭論文にありまうように、今回の改定の趣旨は「昭和二十一年（に制定された）現代かなづかい」の主旨である表音主義を受け、それを根にして整理を加え、多少複雑な姿のあつたもの箇条群を、比較的簡単な組織にまとめたものである、かつ、表音原理に対して慎重尊重の原理が共存することを明白にした一ものといえます。今回の答申により、昭和四十一年六月に文部大臣から国語審議会に対してなされた諮問事項1、当用漢字について、2、送りかなのつけ方について、3、現代かなづかいについてへの対応は、一応終了したこととなります。

○五月四日から六日にかけて開催された東京サミットも終り、護ヶ関界隈もようやく平静な状況に戻りました。円高対策をはじめとして、今後我が国が解決しなければならない課題もいくつか議されたようですが、とにかく無事終ったことは何よりでした。(S)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課  
TEL〇三二六八二二四二代表

「文化庁月報」五月号

昭和61年5月25日印刷・発行

編集 文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番22号

発行所 株式会社 ぎょうせい

本社 山形県東部中央区東原7丁目4番12号

営業部 千代田市南區西五軒町52番地

電話 (023) 266-2244 代表

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 株式会社印刷所

定 価 一八〇円(送料四五円)  
年間購読料 二、一六〇円(送料共)